

プログラマー=体力+腕力?

野呂 正行

神戸大学理学部

「13歳のハローワーク」(村上龍)という本が家にあったので、職業柄、IT関係はどう扱われているかと覗いてみたら、「日本で一番インターネットに詳しい」らしい伊藤穰一という人が、「プログラマーの仕事は体力、腕力」というような発言をしていた。与えられた仕様書を(納期までに)機械的にプログラムに変換する仕事というような意味だろうか。実際、世の中の大多数のプログラマーと呼ばれる人々は、このような形態で仕事をせざるを得ないのかもしれないが、プログラマーを自認する者としては、ちょっと待てよ、と言いたくなる。プログラムが仕様どおり動けばそれでいいのだろうか。性能は評価の対象にはならないのだろうか。

誰かが書いた設計図をプログラマーが実装する、という構図は数式処理においても成立つ。この場合、設計図すなわちアルゴリズムが一緒でも、できあがったプログラムの性能に大きな差が出る可能性がある。数式処理の場合、個々の部品における計算の手間が想像以上にかかるものが多いため、プログラマーが、プログラムの性能に与える影響は特に大きい。にもかかわらず、やはりこの業界でもプログラマーの地位は低いように見える。これは私のひがみか、というと必ずしもそうではなく、国際的に見てもそうらしい。「本業」は数学者で、システムも開発しています、という人は別として、システム開発をメインにやっている人は、必ずしも安定したポジションにいるとは言えないらしい。ヨーロッパ系の有名な数学ソフトで、実は開発が止まっている、という話をいくつか聞くが、他人事とは思えない。「こんなに性能がいいプログラムが書けました」と言っても、「アルゴリズムは100年前から知られている。ちゃんと書けば性能がいいのはあたりまえだ。」と言われるようでは、評価評価のこのご時世を生きていくのは難しい。Knuth先生が御著書に“The art of computer programming”という名前をつけたのは、こんなことまで見越してのことだったのだろうか。

どんどん話が暗くなっていくので、ちょっと楽天的に考えてみよう。体力、腕力というのも、人並外れて、例えばオリンピック選手とか力士並に凄ければ、評価の対象になるだろう。要するに、「あたりまえ」と思えないぐらい高性能なものを作れば、人の見る目も変わってくるに違いない。システム開発を目指す人は日本では少ない。既存の数学ソフト(Risa/Asirも含めて)の中には、有名な割には性能がパッとしないものも結構あり、「動くだけが取り柄」の機能を並べて済ませている場合もある。そんなものを蹴散らすぐらい高性能なものをどんどん書いてくれる若い人がたくさん参入してくれればと思う。